

## 子どもにとっての礼拝を考える

杉本玲子

### I、序 論

子どもにとっての礼拝を考える場合、大きく分けていわゆる「子ども礼拝」を考える方向と、子どもと大人の合同の「礼拝」を考える方向に分かれる。前者の場合、日本では「教会学校」の一部として「子ども礼拝」をもっている例が圧倒的に多く、長さも二十分～三十分程度の短いものが多い。

これらの子ども礼拝は、主日礼拝以外にも教会に併設されている幼稚園等の週日プログラムの中でかなり一般的に見られ、着実な実を結んでいる。対象が子どもにしばらくられるため、子どもに合った賛美歌が選曲され、メッセージもわかりやすいことばで、子どもの必要に応じて語られるという利点がある。通常の礼拝の三分の一以下の時間であるため、長時間静かにすわっている必要がなく、活動的な子どもたちにも参加しやすい。礼拝の順序がある程度流動的であり、泣いたりふざけたりする子どもたちにも臨機応変に対応しやすい。

ところでこの「子ども礼拝」は、いわゆる「大人の礼拝」のミニチュア版ではなく、かなり形式や内容に違いが見られる。(1)多くの場合、招詞、聖書朗読、牧会祈禱、祝禱等が略されていること、(2)礼拝が牧師・教職者によって導かれるのではなく、信徒であるCS教師によって導かれていること、(3)カジュアルな雰囲気、厳かさに欠ける傾向が見られること、(4)聖餐式等が含まれていないこと、(5)暗唱聖句、フランネルグラフ等、大人の礼拝には含まれていないプログラムが含まれていること等である。

このように「子ども礼拝」を見ていくと、子ども礼拝が、いわゆる「子ども会」と「礼拝」の中間的な存在であることは否めない。子どもにとって、子ども礼拝に出席することは礼拝に出席することの代替になるのだろうか。また、礼拝のあり方を考える際に、子どもたちのいない、いわゆる大人だけの礼拝は、聖書的な根拠に支えられたものなのだろうか。本稿では、子どもにとっての礼拝を、聖書の中から、及び教会教育や発達心理学の視点から考えていくことを目的とした。<sup>(1)</sup>

### III、聖書にみられる礼拝と子どもの位置

旧約聖書の中には、イスラエルの民たちが大人も子どもも一つになって主の前に出て礼拝したという記述、或いはそのようにするという命令が、数多く見られる。

申命記二二章七節を見ると、「その所であなたがたは家族の者とともに、あなたがたの神、主の前で祝宴を張り、あなたの神、主が祝福してくださったあなたがたのすべての手のわざを喜び楽しみなさい。」また、一二章一二節には、「あなたがたは、息子・娘・男奴隷・女奴隷とともに、あなたがたの神、主の前で喜び楽しみなさい。(以下略)」

のように、家族そろって主の前に出るということが強調されている。また、モーセは、イスラエルの長老たちに仮庵の祭りの行ない方を指示したが、その中にも「イスラエルのすべての人々が主の選ぶ場所で、あなたの神、主のお顔を拝するために来るとき、あなたは、イスラエルのすべての人々の前で、このみおしえを読んで聞かせなければならぬ。民を、男も、女も、子どもも、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も、集めなさい。…これを知らない彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたが、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、主を恐れることを学ばなければならぬ。」(申三一章一〇〜一三節)と、子どもたちの出席について明記されている。緊急の時さえ、「私達は若い者や年寄りも連れて行きます。息子や娘も、羊の群れも牛の群れも連れて行きます。私たちは主の祭りをするのでから。」(出エジプト一〇章九節)と、モーセは全年令層の人々がそろって礼拝をすべきであると主張したのである。

また、II歴代誌二〇章一三〜一九節を見ると、男も女も子どもたちもそろって主を礼拝した様子が描かれている。「ユダヤの人々は全員主の前に立っていた。彼らの幼子たち、妻たち、子どもたちもともにいた。…それで、ヨシヤパテは地にひれ伏した。ユダのすべての人々とエルサレムの住民も主の前にひれ伏して主を礼拝し、ケハテ族、コラ族のレビ人たちが立ち上がり、大声を張り上げてイスラエルの神、主を賛美した。」彼らは一つとなって主の前にひれ伏し、礼拝し、立ち上がって主を賛美したのである。

イスラエルの民たちが一つとなって神の前に悔い改めている記事もある。エズラ一〇章一節によれば、「エズラが神の宮の前でひれ伏し、涙ながらに祈って告白しているとき、イスラエルのうちから男や女や子どもの大集団が彼のところへ集まってきて、民は激しく泣いた。」大人から子どもまで、心を一つにして悔い改めたのである。

さらに、「シオンで角笛を吹き鳴らせ。断食の布告をし、きよめの集会のふれを出せ。民を集め、集会を召集せ

よ。老人たちを集め、幼子、乳飲み子も寄せ集めよ。(以下略)」「ヨエル二章一五、一六節)のように、単に子どもというのではなく、幼子、乳飲み子という最も小さい者たちについても、はっきりと言及されている箇所もある。或いは、「若い男よ。若い女よ。年老いた者と幼い者よ。彼らに主の御名をほめたたえさせよ。(以下略)」「詩篇一四八篇一二—一三節)のように、様々な年代が一緒に記述され、別々の礼拝システムが存在していたとは考えにくい箇所もある。

このように見ていくと、イスラエルの民が集まった場合、大人が子どもを教えるという要素よりも、大人も子どももそろって神の前に出るといった面が強調されていることに気づく。すなわち内容が、主を喜ぶため、みおしえを読み聞かせるため、祭りをするため、ひれ伏して礼拝するため、賛美するため、また泣いて悔い改めるためと多様であったとしても、大人も子どもも一つになって集まりをもったのである。

一方、子どもたちに対する聖書教育の必要性は、申命記六章七節、一章一九節、三二章四六節などに強調されている。これらの箇所を見ると、家族で、主として父たちが子どもたちに、日々の生活を通してみことばを教えるようにと言及されているのである。このようなみことばの学びは、全会衆が一つになって集まって礼拝をささげることと、ちょうど適切に補い合っているといえよう。

新約聖書を見ると、ペンテコステ後の礼拝の中心は教会に移っていることがわかる。特に初代教会の時代には、集まりが家々で持たれたが(使徒二章四六節、五章四二節、一〇章二〇節)、その場には子どもたちもともにいたと考えた方が自然であろう。また、パウロは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と有名なメッセージを看守に語って、彼とその家の者全部がバプテスマを受けたが、その際、対象から子どもたちを除くことにすると、無理が生じるであろう。(使徒一六章三一—三四節)

まとめると、聖書の例では、大人も子どもも一つとなって主を礼拝するという原則が基本になっていると考えることができよう。

### III、教会教育の立場からみた礼拝

子どもたちへの伝道と教育という視点から考えると、日本では教会学校(或いは日曜学校)が中心的な役割を果たしてきた。日本ばかりでなく、アメリカにおいても、子どもの救いと霊的成長のために、サンデースクールは欠かせない存在であり続けている。シーモアは、その著書の中でサンデースクール、またチャーチスクールが教会教育の中で果たしてきた役割を積極的に評価してまとめた。<sup>(2)</sup> また、ウィルスも、二百年以上の歴史を持つサンデースクールが、今後も教会教育の鍵をにぎる中心的な働きをしようとする結論づけている。<sup>(3)</sup>

一方、そういったサンデースクール、或いは教会教育そのものあり方に対する批判もないわけではない。主な批判の一つは、あまりにも「教育的」であり、学校教育に類似しているという点である。それぞれ担当の「教師」が、分級の「教室」で、年代ごとの「カリキュラム」に沿って、ふさわしい「教授法」によって、適当な「教材」や「ワークブック」を用いて「教える」としたら、教えられる内容は別にしても、方法は学校教育と同一である。「信仰は教育される」ことが可能か、「教育学の研究の成果を教会教育に無批判に受け入れすぎたのではないか」などのような反省が、近年みられるようになった。

キリスト教教育の代表的な理論家の一人、ローレンス・リチャーズは、聖書の真理を伝えるにあたって、学校教育モデルでは不適切であると指摘している。「聖書の信仰を、知的な面だけを重視した学校教育と同じような方法で

伝えるというのは、学習者が共同体の生活に積極的に参加しているという背景のない限り、明らかに不可能である。」<sup>44</sup>というのがリチャーズの持論である。リチャーズは、真理は頭の中で学ぶだけでなく、信仰の共同体の中で、個人的応答と行動をもって体験されるべきものであると主張した。聖書の真理を知的には理解できないような年代層にとつても、礼拝に出席したり、他の家族的な交わりを通して、真理を体験することができるといっているのである。このようにリチャーズは、教会教育イコール学校教育の影響を強く受けた方法による教会学校教育という過去の流れを批判し、神学的な裏付けに基づいて、全年令層を対象とする総合的な教会ミニストリーの必要性を説いたのである。同じように、チャールズ・セルも、教会は神の家族であるという観点から、子どもだけに對する教育に限るべきではなく、世代を越えた交わりと学びをもつことが望ましいと発表した。<sup>45</sup>すなわち、大人も子どもも一つとなった集まりの中で、家族のような交わりをもつこともできるし、互いに学び合い、成長していくことができるというのである。セルは、教会もアメリカの個人主義の影響を受けて、離婚や家庭崩壊の波をもろに受けていることを指摘した。その中で教会のなすべきことは、知的に聖書を教えるといったことにとどまらず、暖かい家族的な交わりを提供し、交わりを深めていく中でお互いから学び合うという機会を設けることであると考えた。また、クリスチャンホームの形成、家族に対するミニストリーを特に重視しなければならないと主張したが、その基本にあるのが、教会の礼拝を家族一緒に守ることであった。

さらに一歩進んで、ジョン・ウェスターホーフは、学校的教訓的モデルは崩壊しつつある、と説く。彼によれば、「違った教育プログラムというのではなく、全く新しいモデルが必要とされている」<sup>46</sup>のである。「現在の学校的教訓的なモデルに対して、全く新しいモデルを考えつくことができなければ、キリスト教教育における我々の努力はむなしく、これから一層効果の薄いものとなってしまふであろう」と、彼は警告する。

全く新しいモデルとしてウェスターホーフが掲げたモデルは、儀式モデルである。ウェスターホーフは、礼拝こそが教会生活の中心であり、礼拝の中に含まれている儀式的な要素がキリスト教教育の中心であるべきであると主張している。<sup>47</sup>ウェスターホーフは、特に祈禱式文の重要性を強調し、決まったことばをくり返し唱えることによつてキリスト教信仰の本質が伝えられると考えた。また礼拝の他にも、様々な儀式を通して、すなわち洗礼式、聖餐式、献児式、按手式、結婚式、告別式などの儀式を通して、子どもたちが単なる聖書の知識を身につけるだけでなく、人生の重要な通過点の意義について、聖書的な観点からとらえることができるなどの利点を掲げている。

このようにウェスターホーフは、子どもたちが同年令の子どもたちと教師という限られた環境で知的な教育を受けるより、広く教会内のいろいろな年代の人々と交わりをもつて、信仰をもって生きるといふことの本本にふれることの方が望ましいと主張した。そして、そのためには、礼拝や儀式が中心的な役割を果たさなければならないと結論をくだしたのである。

リチャーズ、セル、ウェスターホーフはそれぞれの立場から、子どもにとって礼拝に出席することが最優先されるべきであると主張したが、彼らは現代のキリスト教教育の全体の流れの中で特異な存在ではない。むしろ、子どもの回心だけを強調し、子ども伝道集会とサンデースクールだけがキリスト教教育のわく内であると考えられていた一世代前のキリスト教教育観が狭すぎるものであったという反省がなされた結果、現代のキリスト教教育理論の中心が、全年令層に対する総合的なミニストリーを求める方向へと移行していったのである。当然のことながら、サンデースクール、夏期学校などの伝統的な教会教育プログラムが否定されているわけではない。むしろ子ども向けのプログラムだけでなく、より広い年令層を対象とした、より総合的なミニストリーが求められているのである。そして、子どもは子ども礼拝とサンデースクールにさえ出席していればよいといった従来の考え方から、子どもも

礼拝に出席し、それに加えてサンデスクール他のさまざまなプログラムにも参加することが好ましいといった考え  
方へと移行がみられているのである。<sup>11)</sup>

#### IV、発達心理学の研究と礼拝

子どもが聖書をどこまで理解できるのか、という問いに対して、興味深い研究が、近年数多くなされている。ア  
インスワースは、一九六一年、アンケートを用いて学童期の子どもたちの聖書物語の理解度を調査した。ピアジェ  
の理論に言及しながら、アインスワースは、学童前期の子どもたちの聖書のたとえ話の理解は疑問であると結論づ  
けた。<sup>12)</sup> たとえ話のポイントは抽象的であるのに、幼い子どもたちは、それをむしろ字句どおりにしか受け取れない  
からである。

この研究の結果を受けて、ゴールドマンは、聖書物語を用いたインタビュー調査により、宗教的思考力の発達に  
三段階が存在するという結果を発表した。<sup>13)</sup> すなわち、前宗教的段階（宗教的な内容を直観のみによって受け取  
る）、半宗教的段階（内容が具体的な行動と直接的に結び付いていれば、宗教に関連した論理的思考が可能であ  
る）、また宗教的段階（抽象的、象徴的な真理も理解することができ）である。こうしてゴールドマンは、ピアジェ  
の理論に基づいて、宗教的思考力は子どもに発達すると結論づけた。

ゴールドマンは、この結論を宗教教育に適用し、「幼い子どもが抽象的な聖書を学んでも理解できない。かえつ  
て、聖書は難しいものという偏見をもたせし、悪い意味での慣れによって新鮮さを失うなどの弊害の方が大きい  
ので、一三才に達する前までの直接的な聖書教育は控えた方がよい」と主張した。<sup>14)</sup> この研究を境に、発達心理学  
特にピアジェを中心とした認知主義的心理学の結果を教会教育へと適用しようとする試みが一般的になっていった。  
確かに、子どもたちの知的な聖書理解のレベルは、年令と深い関係があり、いくつかの段階ごとに質的に違った理  
解を示しているという点では、何人かの研究者たちの裏付けを得た。<sup>15)</sup> さらに、ピアジェだけでなくコルバークの理  
論を軸として教会教育への適用を考えていく研究も試みられた。<sup>16)</sup> このような発達心理学的アプローチは、キリス  
ト教育の研究の間で一時期脚光を浴びたのである。

しかし、その後、聖書理解を純粋に知的なものにとらえ、認知主義的心理学をそのまま聖書理解に適用しようと  
する研究方法に疑問が投げかけられるようになった。ホーキンスは、抽象的、象徴的な聖書理解を成熟した宗教思  
考と同一視することは疑問であるという見解を発表した<sup>17)</sup>、ペリーマンも理性的、命題的、分析的な知識だけに  
どまらず、体験的に「知る」面も必要であると指摘した。<sup>18)</sup> ウイルコクスは、人間には合理的、論理的、分析的な面  
だけでなく、創造的、独創的、直観的な面もあるので、どんなに小さい子どもでも、その年令にあった聖書の理解  
が可能であると主張した。<sup>19)</sup>

最近の子どもたちの聖書理解の調査によれば、形式的操作思考の発達が、聖書理解にとってそれほど決定的では  
ないという結果があげられている。すなわち、聖書理解をただ認知的な面だけに限定してしまう必要はない。幼い  
子どもにとっては、見たり、聞いたり、触れたりすることを通して、直観的に、体験的に聖書を理解することがで  
きるという点が、重要視されてきているのである。<sup>20)</sup>

その体験の中で最高のものとされているのが、神を礼拝する「体験」である。或いは、ウェスターホーフが指摘  
したように、礼拝や儀式に出席するという体験である。人々が敬虔に礼拝している姿を通して、子どもたちも敬虔  
を学び、神の臨在に触れ、神への信仰を感じとっていくのである。このように直観的、体験的に神を知るといふ点

では、年齢制限はなく、むしろ子どもたちが幼ければ幼いほど、靈適雰囲気<sup>16</sup>に敏感であろう。こうして、礼拝に出席することを通して、子どもたちは、一般的に考えられているよりかなり幼い頃から、多くのものを学び取ることができる。そして、このように幼少の頃から礼拝に出席している子どもは、形式的操作思考が発達してくるよりはるか以前から、聖書の真理について洞察することができるという調査結果もあげられている。<sup>19</sup>

発達心理学的研究方法、特に認知主義的研究方法の全盛時代には、幼い子どもたちの能力、理解力については、かなり低く見積もられていた。それで、大人と一緒に礼拝を守るよりは、年別クラスにわかれて、そこでそれぞれの年齢ごとのニードにあつて組み立てられているレッスン案に従つて、子ども礼拝を守り、またさまざまな活動に従事した方がよいという考えの方が一般的であつた。もちろん、子どもたちの発達段階に合わせて考案された礼拝ガイドブック、教材などからは、学ぶべき点も多い。<sup>20</sup>けれども、現在は、逆にそういった子ども礼拝だけに限定しないで、礼拝出席を奨励しようという動きの方が主流になりつつある。幼い子どもたちに対する直接的な聖書教育は有害であるというゴールドマンの説は、ほとんど省みられていない。むしろ、信仰は礼拝の中で養われ、成長していく要素が強いと考えられ、礼拝論の中に教育を包括しようという挑戦さえみられるほどである。<sup>21</sup> ウェスターホーフは、さらに一歩進んで、子どもにとって礼拝が無意味なものだとするならば、その礼拝自体を変えるべきであるとさえ主張している。<sup>22</sup>ともあれ、子どもが大人と一緒に礼拝することが望ましいという意見が、発達心理学の視点からかなり一般的に受け入れられてきているのである。

## V、子どもの礼拝出席の実際

では、具体的にどうしたら子どもも一緒に礼拝をささげることができるのだろうか。一緒に礼拝をもつことによる利点は何だろうか。実際的に困難な点と、それに対する対応策にはどういったものがあるのだろうか。

子どもが礼拝に出席することによる利点としては、次のようなものが考えられる。

①教会は一つの家族（エペソ二章一九節）であるというみこじばが実感でき、同じ賛美歌を歌い、一緒に祈り、同じみこじばに耳を傾けることによって、霊的な一致が生み出される。神の家族の一体感が味わえる。

②子どもたちの中に、神を畏れる気持ち、敬虔さなどの霊的な資質が、幼いうちから養われる。礼拝する習慣が、幼いうちから身につけて、人格形成上も好ましい。

③礼拝、また聖餐式、洗礼式などに参加すること自体が、神の臨在にふれる体験学習となる。子どもたちも、体験を通して聖書の真理を理解することができる。

④イエスご自身が「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」（マタイ一八章三節）と言われたが、子どものものも素直さや純粹さなどから、皆が教えられる。

⑤子どもたちが加わることによって、礼拝の活気が増し、将来への希望、明るさ、喜びなどを感ぜさせる。それに対して、子どもが礼拝に出席することによって考えられる困難な点は以下のとおりである。

①教会の会堂が狭い場合、大人と子どもがともにすわることのできる物理的なスペースがない。

②多くの子もまたは教会学校の礼拝から出席しており、長い時間緊張が続かない。物理的に、じっとしていられなくなる。特に日本のプロテスタント教会の場合、説教が礼拝の中心のように考えられ、長いことが多いので、

静かにできない。

③やはりプロテスタント教会では、儀式的な面が簡略化されているため、子どもが礼拝中にできる体験といっても限られてくる。

④一般的に礼拝は大人を対象に考えられているため、説教は子どもにとっては難しくわかりにくい。そのような中で、礼拝はつまらないからでたくない、のように、子どもが反抗的になってしまう例がある。

⑤礼拝全体が騒々しい雰囲気になってしまう場合がある。静かに心を落ち着けて礼拝に集中できないなどと、周りの人から苦情が出ることもある。

⑥乳幼児をもつ母親自身が、子どもの泣き声や騒ぐ声のために周りに気を使うことを好まず、一緒に礼拝堂で礼拝を守ることを望まない場合がある。

さて、これらの困難な点に対して、対応策として考えられているのは下記の点である。

①子どもたちはみな教会の子どもという意識をもつ。神の家族の一員として、愛をもって子どもたちを受け入れ、またしつける。

②礼拝を大人だけが対象とせず、子どもにとっても受け入れやすい方向に考える。

③子どもたちのために、よく見える席、すわりやすい椅子を用意するなど、物理的な環境を整える。

④クリスチャンホームの場合、日頃から家庭礼拝などを通して親が礼拝のすばらしさを教え、子どもの心を整える。礼拝を一週間の最高の時と考え、それに向けて子どもの生活を整える。<sup>28</sup>

⑤子どもたちにも、説教中にメモをとるなど積極的な姿勢で礼拝にのぞむように奨励する。

⑥子どもたちに特別賛美などの奉仕に参加してもらうなど、礼拝に主体的に参加できるよう工夫する。

⑦子どもたちの両親と、牧会者、教師などとのコミュニケーションを常に保つ。子どもが礼拝に出席することの重要性を、両親に教える。子どもが礼拝に落ちついて出席できるようになるために、模範を示し、また忍耐強く励まし続ける。

⑧子どもたちを歓迎する姿勢を明らかにするよう、教会員に呼びかける。聖書を開くなどの手助けが必要であれば、進んで行なうよう指導する。

⑨礼拝の中の音楽、美術、或いは儀式的要素などの言葉によらないコミュニケーション (nonverbal communication) の部分を重視する。

⑩礼拝が教会学校礼拝のくり返しになってしまわないように配慮する。すなわち、教会学校ではそれぞれの年代ごとの分級を中心に考え、子どもたちがさまざまな活動に主体的に参加できるようにプログラムを用意する。身体を動かしたりするゲームも含めて考えるなどの工夫をし、子どもたちに長時間の忍耐を強制して、後で教会に対する拒否反応がでないように留意する。

⑪親子が礼拝を守ることのできるようなスペースを確保し、子どもが泣き出したりした場合でも、スムーズに移動できるように配慮する。

では、具体的に子どもが礼拝に出席する場合、どのような方法が可能であるだろうか。現実的に、左記の五つの可能性が考えられる。

A 従来の礼拝の内容を原則的には変えないで、子どもにも出席を奨励する。

B 従来の礼拝の内容を、子どもにも参加しやすいものに変えて、子どもにも出席を奨励する。

C 従来の礼拝の中で、定期的にファミリー礼拝のような特別プログラムを設け、その時には子どもにも出席を奨励

する。

D 従来の礼拝の中で一部分だけ（たとえば説教の前まで）子どもも礼拝に出席し、それ以降は別プログラムへと移行する。

E 従来の礼拝のまま、親子のための特別の場所（たとえば母子室、ビデオ室）を設け、子どもにも出席を奨励する。この中で、どの方法が適切かは、教会の物理的な広さや設備、子どもの年齢や人数、また礼拝プログラム、説教の内容と長さ、教会員の構成などによって、微妙に異なるであろう。親の立場、特に乳幼児をもつ親の立場からは、Bの希望が出される場合が多い。教会によっては、子どもの出席に合わせていわゆる「子ども賛美歌」を賛美の中に取り入れたり、子どもたちへの短い聖書のお話などを組み込むなど、工夫をしている例もある。

また、Cのように、月に一度のファミリー礼拝をもったり、年に何回かの大人と子どもの合同礼拝を企画したりしている教会も多い。全面的に、大人と子どもが一緒に礼拝するようになる前の、移行期、準備段階としてCを考えている場合もある。

また、乳幼児の人数が多く、会堂のスペースに限りがあるなどの場合、最も現実的な対応策として考えられているのはDとEである。伝統的な教会などで、子どもが礼拝に出席するというAからCまでの案に、他の教会員の同意が得られぬ場合、DまたはEの方法を採用している場合も多いだろう。または、子どもの年齢差を考え、各家庭の教育方針を重んじるということで、ADEの中から各家庭が自主的に選択するようにと勧めている教会もある。ただ、Eの場合は、スピーカーを通して説教を聞き、ビデオ画面を通して、礼拝のようすを見るなど、間接的であり、受身になってしまう。神を礼拝するという緊張感が薄れやすく他の子どもたちと遊ぶことが優先されやすいので、あまり好ましいとはいえない。他の選択肢が可能な場合は、避けた方がよい。

もちろん、Aを理想として掲げて、子どもが幼少の頃から礼拝に出席できるように、時間をかけて教会ぐるみで取り組んでいる教会も多い。前述したように、子どもの礼拝出席については、単なる理想論だけで終わらせることは不可能であり、現実のわく内ですべての方法が最適であるかを模索している教会も多いと思われる。いずれにしても、子どもが礼拝に出席することによって、神の臨在にふれ、敬虔さを学び、信仰が養われていく機会が与えられるように望みたい。

ただし、今までの議論で子どもと言った場合、ほとんどクリスチャンホームの子どもの指していた。地域のいわゆる未信者の家庭の子どものことを考える場合、事情は少し異なってくる。もちろん、最終的には救われて、大人と一緒に礼拝を通して信仰が養われることが目標となってくるであろうが、全く教会になじんでいない子どもたちに最初から礼拝出席をすすめて、教会への門を狭くしてしまうことは望ましくないであろう。最初は、教会学校などの短い礼拝に出席することをすすめる方が適当であると考えられる。クリスチャンホームの子どもたちも、礼拝に出席すれば教会学校は必要なしというのではなく、地域の子どもたちを誘って教会学校に出席するようにすすめるべきであることは、いうまでもない。

いずれにしても、子どもが礼拝に出席できるようになるまでには、長いプロセスを要する。特に乳幼児の場合には、長い間の積み重ねが必要となつてこよう。子どもによつても個人差がある。親も教会員もあせらずに、またあきらめずに長い目でみていくことが大切である。子どもが礼拝中に騒いだ場合の対応も、たいたたり、逆にお菓子を与えてなだめすかしたりなど、その場限りの対応では、長期的な効果も期待できないし、礼拝に出席するという本質的な意義すら見失われてしまうであろう。親も教会員も、忍耐をもって折り深く子どもの礼拝出席を励まし続けていきたい。



礼拝中に、子どもたちをどう扱えばいいのか、このような問題に頭を悩ませている教会は少なくない。本稿では、聖書の中から、また教会教育や発達心理学の観点から、子どもにとっての礼拝について考察してきた。

聖書の中からは、大人と子どもが別々に主に礼拝をささげるといわず、一つになって主の前に集い、主を喜び、みおしえを学び、祭りをし、ひれ伏して礼拝し、賛美し、或いは泣いて悔い改めることが基本であったことを学んできた。また、教会教育の視点からは、サンデースクールなどの教会教育が、一時期、学校教育の影響を直接的に受け過ぎていたという反省点があげられた。そして、信仰は知的な教育だけによって養われるわけではなく、礼拝に出席する体験や神の家族との交わりも重視されるべきであることが指摘された。発達心理学の視点からも、「幼い子どもに聖書は理解できない」という発想が認知主義的に偏りすぎていたという反省がなされた。そして、子どもたちが礼拝に出席する中で、直観的に神の臨在にふれ、神への信頼と服従を体験的に学んでいくことができるという点が確認されたのである。

結論的にまとめると、子どもは教会学校の子ども礼拝に出席すればよいと限定することなく、礼拝にも出席するように奨励することが望ましい。特にクリスマスチャンホームの子どもの場合、幼少の頃から家族と一緒に礼拝に出席することが理想である。子どもが礼拝に出席することに関しての困難な点なども若干指摘されたが、それぞれに対応策を考えていけば、十分に乗り越えられるものである。具体的な方法としてもいくつかの可能性があげられたが、それぞれの教会の実情に合う形式を検討し適用していけばよい。教会としても、ルールを設けるというよりも、子どもの年齢などの状況がそれぞれに違うのであるから、長期的な視点から、また柔軟な姿勢で、祈り深く見

守っていく必要がある。

このように礼拝を重視する姿勢は教会教育を軽視する立場とも、年代ごとのプログラムを排除しようとする立場とも無関係である。むしろ礼拝を軸として、子どもたちのための新しい総合的なミニストリーを構築していく必要があるのである。子どもといえは教会学校という安易な考え方にとどまらないで、現在の児童伝道、教会教育を評価し直す所から出発すべきである。その上で、より望ましい子どもたちのための総合的なミニストリーが築き上げられていくことを期待したい。

## 注

- (1) 子どもにとっての礼拝というテーマに関しては、家庭礼拝、しつけ的な面など、親の立場から論じられることもある。本稿では、スペースの都合上、教会のコンテキストの中で考えるという面に限定した。
- (2) Jack Seymour, *From Sunday School to Church School* (Washington, D.C.: University Press of America, 1982).
- (3) Wesley R. Willis, *200 years and Still Counting* (Wheaton: SP Publications, 1980).
- (4) Lawrence O. Richards, *Experiencing Reality Together: Toward the Impossible Dream* In Norma Thompson (ED.) *Religious Education and Theology* (Birmingham, Alabama: Education Press, 1982), p.215.
- (5) Charles M. Sell, *Family Ministry* (Grand Rapids, MI: Zondervan Publishing House, 1981).
- (6) John H. Westerhoff III, *Will Our Children Have Faith?* (New York: The Seabury press, 1976), p.23.
- (7) *Ibid.*, p.24.
- (8) *Ibid.*, p.50.
- (9) サンデースクール(日曜学校)とチャーチスクール(教会学校)では歴史的には若干の違いがあるが、本論文では言及されていない。海外では前者の方が一般的であるので、アメリカなどのプログラムを指す場合、「サンデースクール」とした。日本のプログラムについて言及する場合、最近の流れに従って「教会学校」という表現を用いた。なお、煩雑さを避けるため、言い換えは最小限に

- (10) D. Ainsworth, *A Study of some aspect of the growth of religious Understanding of children aged between 5 and 11 years.* (Unpublished dissertation, University of Manchester, 1961).
- (11) Ronald Goldman, *Religious Thinking from Childhood to Adolescence* (New York: Seabury, 1964)
- (12) Ronald Goldman, *Readiness for Religion* (New York: Seabury, 1965).
- (13) J.H. Peatling & C.W. Laabs, "Cognitive Development of Pupils in Grades Four through Twelve: A Comparative Study of Lutheran and Episcopalian Children and Youth," *Character Potential* (1975), pp.107-115.
- (14) Lawrence Kohlberg, *The Philosophy of Moral Development* (vol.1). (San Francisco: Harper & Row, 1981).
- (15) K.G. Howkins, *Religious Thinking and Religious Education* (Leicester: Theological Students Fellowship, 1977).
- (16) Jerome W. Berryman, "Being in Parables with Children" *Religious Education* 74 (1979), pp.271-285.
- (17) Mary M. Wilcox, *Developmental Journey* (Nashville: Abingdon, 1979).
- (18) 鈴木余十「聖書の認識とキリスト教の神学」『キリスト教教育論集』第二号（一九九三年）六一頁。  
 福澤社、六一頁。
- (19) Sonja M. Stewart and Jerome W. Berryman, *Young Children and Worship* (Louisville, Kentucky: Westminster/John Knox Press, 1989).
- (20) 伊藤聖「聖書『Young Children and Worship』」『キリスト教教育論集』第二号（一九九三年）七十七頁。
- (21) John Westerhoff III, *Values for Tomorrow's Children* (Pilgrim Press, 1970) p.77
- (22) Robbie Castleman, *Parenting in the Pew* (Downers Grove, IL: Inter Varsity Press, 1993).

(町田メリスチャンセンター教育主任)